

(要約版)

嗜好品を教えるということ-現代中央アジアの学校教育における茶の表象と国民形成-

河野 明日香 (筑波大学大学院人文社会科学研究所・教育学)

1. 目的

80年代後半から90年代にかけて進行した冷戦の終焉によるソ連崩壊と民族紛争の勃発、世界のグローバル化は、「国家」や「国民」、「民族」とは何かという大きな問いを国際社会に提起した。これまで、近代国家は国家形成とその統合過程で、「国民」という概念やナショナル・アイデンティティを創り出そうとしたが、冷戦後の世界の劇的な変容により、国民国家の在り方は大きく揺らぐことになった。この国民国家の揺らぎは世界各地にみられるが、それは旧ソ連圏も例外ではない。そこでは、ソ連崩壊後、新たに誕生した国々の「国民」をつくるため、かつてソ連政府のイデオロギー政策や無神論に抑圧された自国文化や伝統文化、宗教的儀礼、慣習などが新国家のシンボルとして再興されつつある。

本研究では、現在の旧ソ連・中央アジア各国の学校教育において、中央アジア民族の間で伝統的に嗜好されている茶や喫茶文化がどのように表象されているのかに着目し、茶を中心とした「嗜好品」を子どもたちに教えるということがどのような機能を有しているのか、そのような教授行為が国民形成にどう連関しているのかについて明らかにすることを目的とした。

中央アジアの喫茶空間には、古来より行われてきた住民相互の触れあいや情報交換のような「住民交流の場」としての機能だけでなく、伝統的な喫茶文化が息づく「伝統を身近に体験できる場」としての機能もあり、政府もその点に注目していると考えられる。国家の歴史や伝統文化の復興、抽象的な愛国心の醸成だけでなく、具体的に日常の喫茶習慣に基づく教育がなされることが伝統文化に根差した人間形成を行うことにもなり、ひいては国民形成にもつながっていくという過程の検討は、現在の国家統合や国民形成に対する視座の提供に連なるといえる。

2. 方法

研究方法には、教科書や公文書、法令などの文献分析と合わせ、インタビューなどの質的調査を採用した。調査対象国は、カザフスタン、ウズベキスタン、キルギス、タジキスタンの旧ソ連中央アジア4カ国とし、以下の調査・分析を実施した。

【1】教科書や法令、国家教育スタンダードにおける茶と喫茶文化の扱われ方の分析
調査対象国の「道徳」や「礼儀」、「祖国意識」などの教科書、憲法、教育法などの法令、国家教育スタンダードなどの分析を行った。

【2】各国の教育機関及び関係者に対する聞き取り調査

茶や喫茶文化の教授やお茶文化を学校行事に取り入れている教育機関あるいはかつて学校教育における茶や喫茶文化を体験した学生などを選出し、茶や喫茶文化についての授業の行い方、授業内容、伝統文化についての学校行事の実態、子どもたちの受容などについて、主に授業・行事担当教員や学生への聞き取り調査を実施した。

3. 結果

カザフスタンの教科書では茶や喫茶文化は過去・現在を問わず、人々の生活を彩る道具として、また日常に深く結びついたものを通しての学習理解促進のため頻繁に登場していた。教員や生徒の立場からも、日頃から接しているものを通じた教材や題材を扱う方が生徒の理解を助け、また実生活においても役立つことが指摘されていた。ウズベキスタンでは、道徳や音楽科目で茶や喫茶文化が扱われていたが、そこでは歴史的英雄のようなバーチャルな国家シンボルとは異なり、日常に即した伝統や民族文化、民族のメンタリティなど、極めてリアリティを持ったシンボルとして表象されていた。

キルギスの「造形美術」の教科書では、キルギスの民族帽や伝統衣装、食べ物などが静物画の課題とされているが、現地の喫茶文化を象徴するチャイハナの様子や茶器などもその一環として明示されていた。しかし、同国の茶や喫茶文化は、ウズベキスタンのように伝統や民族文化のシンボルとして盛んに学校教育に取り入れられているわけではなく、あくまで作品や生活に根付くものとして取り上げられているという声もあった。タジキスタンの学校教育でも具体的事例や教材を用いて、国の伝統や民族文化が扱われており、そこではお茶や喫茶文化も取り入れられるようになっている。

4. 考察

資料・調査データを検討した結果、各国が自国文化や自民族の特徴、日常性を強調しつつも、それを中央アジアや国家、民族メンタリティの象徴として表現していることが明らかとなった。「嗜好品」あるいは「嗜好」習慣の是非を問いつつ、それと抱き合わせに民族文化「観」や伝統「観」を子どもたちに植えつける教授行為は、やがては国家と教育の関係という原理的課題に連なるものである。換言すれば、「嗜好品」を教えるといった行為は、単に民族の伝統や習慣を学び、実生活に役立てるのみならず、その伝統や文化の延長上にある国家や国民について学び、ひいては子どもたち自身の国民意識を高揚させることに直結していると解することができる。本稿でみてきた中央アジア諸国における学校教育や各教科書で復古主義的伝統や民族文化が教えられ始めているのは、ソ連崩壊を機に、帝政ロシアやソ連政府によって一度中断させられた中央アジア独自の伝統や民族文化（あるいは、広義の宗教文化）による愛国心教育と教育を介しての国民形成が再興してきたことを示しているといえる。